

家庭婦人バスケットボールクラブの存続・発展に関する研究

関谷 共同子 丸山 富雄

キーワード：家庭婦人バスケットボール，地域スポーツクラブの存続・発展

A Sociological Study on Continuity and Development of Basketball Club of Housewives

Kumiko Sekiya Tomio Maruyama

Abstract

In this study, I tried to solve how community sports clubs can be developed, by researching the actual conditions of existing basketball clubs. I tried to find problems and what is necessary when a new sports club is organized and a sports culture is created. It should break away from the "closed society" and isolationism in the sports clubs. I studied a housewives' basketball club in Miyagi prefecture.

The summary is as follows:

1. The present housewives' basketball clubs are characterized by closing to new comers and isolationism. These are characteristics similar to what regional sports clubs experience in our country.
2. When club members think about the matter in terms of how future clubs should be:
Those who think housewives' basketball clubs need to promote sports exchange among basketball clubs tend to concentrate on "Victory first". Those who think housewives' basketball clubs need to promote friendship exchange are opposed to simply winning all their games.
3. Those members who are opposed to "Victory first" can be pioneers in the coming new clubs. This is because they seek for promotion of friendship with new people.

Keywords : Basketball club of Housewives, Continuity and Development of Community Sport Club

1. 研究の動機・目的

現在，地域スポーツクラブは大きな転換期を迎えている。少子化による学校運動部の統廃合や連合チームの編成，不況による企業クラブの休廃部にみられるように従来のわが国のクラブに対する限界が認識され，スポーツの基盤が大きく変わろうとしている。このことから，スポーツクラブのあり方を改めて問いたす時期にきてい

るともいえるだろう。今後，多様化・高度化する国民のニーズに応える新たなスポーツクラブの展開を考えた場合，それは，一人の一生涯という長い期間に対応し，更に次の世代に受け継ぐことができるような「地域に根ざしたスポーツクラブ」の育成・定着を図ることである。以上のことから，これからの望ましいスポーツクラブのあり方について考えた場合，これまでのわが国のスポー

構造をもつクラブということができる。

「Wクラブ」は、結成されて約15年であり、このクラブを存続させている外部的条件は、「安定した集団基盤」および「組織・大会」である。クラブ員は学生時代のOGを中心に構成され、既婚者と未婚者が存在する。そのため、一般のクラブとして登録をしており、目標もクラブ東北大会出場と高い。チームワークもよく、練習量も他クラブと比較すると多い。目標も達成されており、戦績も強い。現在特に大きな問題もなく存続してきている。このクラブは、試合の選手決定はクラブ内のリーダーが行うことから、首脳型の構造を持つクラブということができる。

以上、5つのクラブについて述べたが、これら5つの

宮城県内家庭婦人バスケットボールクラブの現状をまとめると、表1のとおりである。

2. クラブ員の実態と意識

1) クラブ員の属性

現在活動しているクラブ員は、クラブによる違いはあるものの30歳代が最も多く57.9%であり、次に40歳代が29.8%である。そして、専業主婦が50.9%であった。全員が学生時代にバスケットボール部での活動経験があり、初心者は一人もいなかった。学生時代に経験した大会をみても全国大会、国体に出場した者が36.8%ほどおり、レベル的にはかなり高い。

表1 家庭婦人バスケットボールクラブの現状 -まとめ-

	Sクラブ	Kクラブ	Gクラブ	Lクラブ	Wクラブ
結成	20年以上	15年以上	約10年	約10年	約10年
クラブ存続の主要な外部的要因	強力なリーダー	練習施設	安定した集団基盤	練習施設	安定した集団基盤 組織・大会
権限構造からみた運動部構造	首脳型	部員型	部員外型	部員型	首脳型
きっかけ	バスケット経験者 夫が教員チーム	市や町のスポーツ教室	部員のひとりがメンバー 募集の宣伝広告を行う	ある人がメンバー募集 の宣伝広告を行う	学生時代のOG 以前他チームだった友人
メンバー数	15名	19名	15名	15名	12名(家庭婦人)
指導者	いない	クラブ員	部外者	クラブ員と部外者	クラブ員と部外者(夫)
役割	キャプテン・副キャプテン マネージャー・コーチ 会計	部長・キャプテン 会計・その他	部長・キャプテン 副キャプテン	キャプテン・副キャプテン 監督・コーチ・その他	キャプテン・副キャプテン 監督・コーチ・会計
任期	その時の状況で	1年ごと	1年ごと	1年ごと	その時の状況で
規約	あり	あり	あり	あり	ない
勧誘	行っていない	行っていない	行っている (経験重視)	行っていない	行っている (経験・人柄)
退部者	いる(8名)	いる(10名)	いる	いる(8人)	いる(5人)
運営費	月会費・入会金	月会費・入会金	年会費・月会費	月会費・入会金	年会費・月会費
会員間の交流活動	行っている 温泉旅行・ミーティング	行っている 新年会・総会兼忘年会	行っている 忘年会	行っている 忘年会	行っている 新年会・花見・ピクニック いも煮・忘年会・打ち上げ
気の合う会員同志の交流	お茶会・バーベキュー	特になし(皆に必ず声をかける)	昼食会		家庭訪問・飲み会 買い物・海水浴
目標	全国大会出場	練習の成果を発揮する 大会での1勝	クラブ杯勝利	勝利	クラブ東北大会出場
練習形態	だいたい決まっている	練習日が決まっている	練習日が決まっている	練習日が決まっている	だいたい決まっている
練習回数	週1回来満	週1回	週1回	週1回	週1~2回
練習時間	土曜日午前・午後 休日午前・午後	平日の午前	平日の午前	平日の午前 土曜日の午前	平日夜・土午前午後夜 休日午前午後夜
参加状況	半数以上参加	毎回ほぼ全員参加	半数以上参加	半数以下	半数以上参加
参加した大会名と成績	全国大会・クラブ大会 国体予選・河北杯 県ママさん大会	クラブ大会・村上杯 国体予選・河北杯 県ママさん大会	クラブ大会 県ママさん大会	クラブ大会・村上杯 国体予選・河北杯 県ママさん大会	国体予選・河北杯 クラブ杯・オールジャパン (予選)
年間試合数	5試合以下	5試合以下	5試合以下	5試合以下	6試合以上
試合の選手決定	全員出場	全員出場 対戦相手次第	全員出場	その他 その時の状況で	全員出場
選手決定の要因	クラブへの貢献度 技術経験	クラブへの貢献度 技術経験	経験・技術	その時の状況で	クラブへの貢献度 技術経験
練習への参加	まあ満足	満足	やや満足	やや満足	満足
人間関係	まあ満足	まあ満足	まあ満足	満足	満足
参加大会数	まあ満足	まあ満足	まあ満足	まあ満足	満足
大会成績	まあ満足	やや満足	不満足	やや満足	満足
会員間の相互交流	満足	まあ満足	まあ満足	まあ満足	満足
問題点	練習場所がない 練習や大会に人数が そろわない	チーム内の交流が少ない 他チームとの交流がない 大会試合が少ない 社会的理解があまりない	練習場所がない 練習や大会に人数が そろわない	他チームとの交流がない 練習や大会に人数が そろわない	なし
クラブ活動以外の活動 (バスケット関係)	県協会への協力	県協会への協力 ミニバス指導	県協会への協力 ミニバス指導	要請があればする 県協会への協力	県協会への協力 ミニバス指導
(バスケット関係以外)	していない	していない	していない	していない	地区行事への参加
試合大会への意見反映	わからない	反映されている	わからない	わからない	反映されている
社会的理解	わからない	ない	ない	ある	ある
他チームとの連携	賛成	賛成	やや賛成	なんとも置えない	賛成
地域住民との交流	やや賛成	やや賛成	やや反対	なんとも置えない	やや賛成

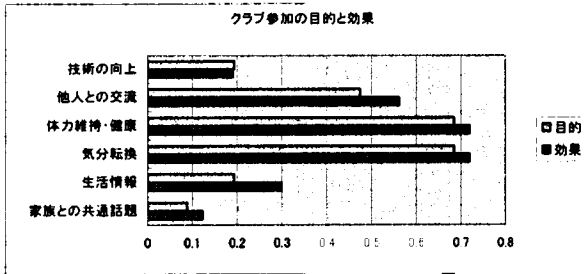
2) クラブ活動について

現在のクラブに所属し4～8年の者が最も多く、42.1%である。クラブ活動を継続する目的は「技術の向上」が19%、「体力の向上・健康維持」が68%、「気分転換」が68%、「生活情報を得る」が19%などである。またそれぞれの目的に対する効果は「技術の向上」は19%と変わらないものの、「体力の向上・健康維持」が72%、「気分転換」が72%、「生活情報を得る」が30%などいずれも数値が高くなっていることから、目的に対する効果も得られている。

表2 クラブ参加の目的と効果

	目的	効果
技術の向上	19%	19%
他人との交流	47%	56%
体力維持・健康	68%	72%
気分転換	68%	72%
生活情報	19%	30%
家族との共通話題	9%	12%

図1 クラブ参加の目的と効果



クラブに対する今後の「継続意思」については、(1)年齢、(2)学歴、(3)学生時代に経験した大会、(4)現在のクラブ所属年数、(5)クラブ活動の満足度、(6)他の家庭婦人バスケットボールクラブとの連携、(7)住民との交流の7項目とクロス集計を行った。その結果、クラブ員の属性と継続意思の有無との関係については、あまり関係がみられなかった。クラブ活動の満足度、他の家庭婦人バスケットボールクラブとの連携、地域住民との交流については、それぞれの項目によって継続意思の有無による違いが見られ、クラブ活動の満足度が高く、これからのクラブへの意向に前向きな者ほど継続意思が強いことがわかった。

3) これからのクラブへの意向

これからのクラブのあり方について、「他の家庭婦人バスケットボールクラブとの連携」「地域住民との交流」

の2項目について、「賛成」「やや賛成」「反対」の3段階尺度で調査を行った結果、いずれの項目についてもそれほど高い賛意は得られなかった。「賛成」「やや賛成」「反対」に対し、それぞれ3点から1点を与え平均値で比較した結果、「他の家庭婦人バスケットボールクラブとの連携」が2.19、「地域住民との交流」が1.89であり、「他の家庭婦人バスケットボールクラブとの交流」が5%レベルで有意に高い結果となった。(表3、表4)

表3 クラブ所属年数別にみた他クラブとの連携の違い

所属年数	平均	標準偏差
～1年	1.71	0.451
2～5年	2.26	0.771
6～10年	2.25	0.75
11年～	2.26	0.713
全体	2.19	0.736

表4 クラブ所属年数別にみた地域住民との交流の違い

所属年数	平均	標準偏差
～1年	1.42	0.494
2～5年	2	0.73
6～10年	1.93	0.747
11年～	1.94	0.51
全体	1.89	0.667

※: P<0.05

3. 開放的志向をもったクラブ員の特性

前述の「他の家庭婦人バスケットボールクラブとの連携」「地域住民との交流」について賛意を示した者は、自分のクラブ以外にも交流を求めていることから、開放的志向をもつものと考えられる。そして、その要因を明らかにするために、数量化Ⅱ類を用いて開放的志向をもつクラブ員の特性を分析した。(表5、表6) その結果、「他の家庭婦人バスケットボールクラブとの連携」については、現在の人間関係やクラブ内の交流については満足しているが、練習や大会成績、参加大会数などバスケットボールに関することには満足していないものが賛成していることがわかった。このことから、強い勝利志向を持っていることがわかる。また、「地域住民との交流」については、練習、大会成績、参加大会数などには満足を示しているが、人間関係やクラブ内の交流については満足していない。このことから、強い勝利志向には反対していることがわかる。したがって、これからの新しいクラブである「総合型地域スポーツクラブ」への発展となると、その理念・特徴などから、これまでのクラブ員に多く見られるような勝利志向を持つ者よりは、勝利よりも様々な年代の人と交流を深めたいという者がこれからの新しいクラブづくりの先導者となりうるのではないかと思われる。

表5 家庭婦人バスケットボールクラブの存続発展を規定する要因 数量化Ⅱ類

相関比		他クラブとの連携 0.223		地域住民との交流 0.232	
変数	カテゴリー	スコア	係数 (順位)	スコア	係数 (順位)
練習	満足	-21		230	
	まあ満足	-593	1143	-160	576
	不満足	574	4	-345	6
人間関係	満足	-536		188	
	まあ満足	966	2178	-363	632
	不満足	1642	1	-444	4
参加大会数	満足	42		136	
	まあ満足	338	939	-608	1449
	不満足	601	5	841	2
大会成績	満足	877		-351	
	まあ満足	-438	1379	78	626
	不満足	-502	3	275	5
相互交流	満足	-96		-168	
	まあ満足	135	231	332	971
	不満足	36	6	-639	3
継続意思	ぜひ継続 できれば やめる	-242		-626	
		0	1549	226	2877
		1307	2	2250	1
外的基準	賛成	-593		-360	
	やや賛成	342		-281	
	反対	439		770	

*係数は1,000倍してある

表6 家庭婦人バスケットボールクラブの存続発展を規定する要因 数量化Ⅱ類

(○満足, △やや満足, ×不満)

順位	他クラブとの連携	地域住民との交流
1	人間関係 ○	継続意思 ○
2	継続意思 ○	参加大会数 △
3	練習 △	相互交流 ×
4	相互交流 ○	人間関係 ×
5	参加大会数 ×	大会成績 ○
6	大会成績 ×	練習 ×

IV. 今後の展望と課題

本研究では、既存の単一種目クラブの実態を調査し、クラブが今後も存続し、発展するために必要条件は何か、さらに前述したわが国の地域スポーツクラブの閉鎖性や孤立性から脱皮し新たなクラブづくりや地域のスポーツ文化を創造するためにはどのような課題があり、何が必要なのかを探るため、組織化してスタートしたばかりである、宮城県の家婦人バスケットボールクラブを事例として取り上げた。現在の家庭婦人バスケットボールクラブは、わが国の地域スポーツクラブの特徴である閉鎖性や独立性と似通った特徴をもち、存続をしてきているということがわかった。しかし、これまでの地域スポーツクラブには限界がきているといわれている。それでは、開放的な新しいクラブへと変革するためにはどのような

方策が必要か。これまでの調査から、これからのクラブのあり方として、「他の家庭婦人バスケットボールクラブとの連携」については必要だと感じている者は強い勝利志向をもっており、「地域住民との交流」が必要だと感じている者は強い勝利志向に反対している者だということがわかった。そして、強い勝利志向に反対するクラブ員は、ソトへの交流を強く求めていることから、これからの新しいクラブ（総合型地域スポーツクラブ）設立の先駆者になりうると考えられる。この先駆者を開放的志向性をもつリーダーとして、現在のクラブ内でよりよい人間関係を築き、また家庭婦人バスケットボールの新しい大会・試合のあり方を考えていくことで、新たなクラブづくりも可能となるであろう。

既存のスポーツクラブからこれから新たなクラブをつくることは、相当の努力が必要であろう。なぜなら、現在のクラブであっても活動のある程度満足していることも考えられる。そのようなクラブに対して新しいクラブをつくるという提案はなかなか受け入れてもらえないのが現状である。しかし中には、地域生活を豊かにするために多様な住民が相互にかかわりをもつことの意義を理解している人もいるだろう。そのような人材を発掘することが、これから重要となるのではないだろうか。

最後に、本研究の調査対象者は、宮城県で活動する家庭婦人バスケットボールクラブ5チーム、76名であった。今後、さらに調査対象者を拡大し、具体的にこれからの新しいクラブづくりのための検討が残っている。

<引用・参考文献>

- 1) 江刺正吾, 女性スポーツの社会学, 不味堂出版, 1992
- 2) 川辺光, 日本社会の価値体系と日本人のスポーツ観の構造, 体育社会学研究会編, 体育社会学研究10一流競技者の社会学, 同和書院, 1981
- 3) 厨義弘・大谷善博, 地域スポーツの創造と展開 福岡市からの提言, 大修館書店, 1990
- 4) 小谷寛二, 日本人的スポーツの模索的研究, 昭和59年度体育社会学専門分科会合宿研究会報告資料, 1984
- 5) 丸山富雄・本多弘子・仲野隆士・永田秀隆, 離島におけるスポーツ・クラブの実態 宮城県牡鹿町網島「長渡バレーボール愛好会」の事例研究, 仙台大学紀要28(2): 101-108, 1997
- 6) 丸山富雄, 近代性のゆらぎと「遊びとしてのスポーツ」の復権, 仙台大学紀要32(2): 1-8, 2001
- 7) 丸山富雄, スポーツ社会学ノート 現代スポーツ論, 中央法規, 2000
- 8) 三隅二不二, 新しいリーダーシップ, ダイヤモンド社, 1984
- 9) 森川貞夫, 佐伯聰夫, スポーツ社会学講義, 大修館

書店, 1988

- 10) 文部省, 「スポーツ振興基本計画」, 2000
- 11) 中島豊雄他, 地域スポーツ集団の社会的基盤に関する研究, 体育学的研究 10-2, 1966
- 12) 中島豊雄, 地域スポーツ集団の社会学的研究 軟式野球チームの存続と崩壊, 名古屋大学教養部紀要 16 : 59-84, 1972
- 13) 中島豊雄他, 地域スポーツ集団の存続と変容 津市婦人バレーボールクラブの事例研究, 名古屋大学総合保健体育科学 3, 1980
- 14) 中山正吉, 地域のスポーツ研究の軌跡と課題, 体育スポーツ社会学研究 10 : 35-50, 道和書院, 1991
- 15) 丹羽劭昭, 運動集団の構造と機能, 奈良女子大学文学会研究年報 IX : 102, 1966
- 16) 作野誠一, コミュニティ型スポーツクラブの形成過程に関する研究 社会運動論からみたクラブ組織の比較分析, 体育学研究 45, 360-376, 2000
- 17) S S F 笹川スポーツ財団, スポーツ白書 2010 スポーツ・フォー・オールからスポーツ・フォー・エブリワンへ, 扇興社, 2001
- 18) スポーツ安全協会, 地域スポーツクラブの運営に関する調査報告書, 1985
- 19) 菅原禮, 体育社会学入門, 大修館書店, 1975
- 20) 菅原禮, スポーツ社会学への招待, 不味堂出版, 1990
- 21) 総理府, 体力・スポーツに関する世論調査, 2000
- 22) 高嶋實・大河内保雪, 生涯スポーツへの提言, 不味堂出版, 1990
- 23) 竹之下休蔵・磯村栄一, スポーツの社会学, 大修館書店, 1965
- 24) 寺沢猛, 地域スポーツ集団の社会学的研究 スポーツ集団の形成と存続・発展に働く社会的要因, 豊田工業専門高等学校紀要 I : 69-85, 1968
- 25) 地域スポーツ推進研究会, スポーツライフのすすめ 豊かなスポーツライフの実現に向けて, ぎょうせい, 1999